最　優　秀　賞　受　賞　作　文

最優秀賞　津地方法務局長賞

「父の旅路」

津市立東橋内中学校　２年　三行　穂乃芽

「死なんでよかったな、お父さん。なんでかって？だって、私が生まれてないやん。」これは、父が講演の中で「死のうと試みたことがあったが、死にきれなかった」と話したとき、私が心の中で感じた言葉です。中学一年生の人権学習の時間に、私の父が講師として招かれました。だれもが過ごしやすい社会を創るために、父が選ばれたのです。

私の父は「ミオパチー」という病気を患っています。その中でも、「遠位型ミオパチー」というタイプで、筋肉が脂肪に変わり、体の中心から遠い部分が徐々に動かせなくなる病気です。一人でできることが少しずつ減り、他者の助けなしには生活が営めなくなります。そのため、父は障がい者と分類されます。父の生活は車椅子に依存しており、動かせるのは顔と指先だけです。

そんな父は、明るくユーモアにあふれ、私たち家族にとって誇りの存在です。しかし、病気は父の体を蝕み、日常の当たり前を次々に奪っていきました。私は小さい頃からその現実を受け入れてきましたが、出会い学習で父の話を聞いたとき、初めて父の苦しみと葛藤に直面しました。

父が中学校で講演を行うと聞いたとき、「お父さんが学校に来るなんて恥ずかしくないの？」と友達に冷やかされましたが、私は全然気になりませんでした。むしろ、父がどのように障がいと向き合ってきたのか、内面を知るいい機会になると思ったのです。講演は、父が障がいを発症した時の話から始まりました。十七年前、仕事を続けることができなくなり、病院で「現代の医療では治療できない」と告げられました。それでも「何年かしたら薬ができるだろう」と淡い期待を抱いていましたが、その期待は裏切られ、薬の開発は進まず、体は徐々に動かなくなっていきました。この病気は、全国に患者が四百人ほどしかおらず、製薬会社にとって研究開発のコストが採算に合わないことが原因でした。また、政府はより多くの患者がいる難病に補助金を当てたいという現実があるのです。

父は「できたことができなくなること、何をするにも人の手を借りなければなら

ないことに耐えられなかった。このままでは『自分で自分を殺めるしかない』と思ったが、そんな力すら残っていなかった」と振り返りました。普段は明るい父の口から、そんなことを聞くとは思いませんでしたが、その話を聞いたとき、私は心の底から「父が生きていてくれて本当に良かった」と思いました。もし父が命を絶つ選択をしていたら、私はここに存在していなかったのです。その絶望の中で、父を救ったのは母でした。父は、できなくなっていく自分に強くこだわり、専用のトイレを使おうともしませんでした。そんな父に母は「何のためにトイレつくったん。あるのに使わないなんてもったいないやん。」と言いました。この言葉に、父は救われたようで、とても気分が楽になったと言います。動けていたころの自分と、動けなくなった自分との間に葛藤し、苦しんでいた父の姿がよく分かりました。父がその話をする姿を見て、母は当時を思い出し、涙を流していました。

現在、父は「ＮＰＯ法人　ぷてぃ・ぼぬーる」という団体に所属しています。この法人は、難病患者や障がい者、その家族を支援し、地域社会の理解向上や医療発展に寄与することを目的としています。父は動ける指を使い、スマホでデジタルイラストを描いています。その絵が地域のお祭りのポスターに選ばれ、市内各所に掲示され、新聞にも掲載されました。父はそのとき、「見た人が元気になってくれたら嬉しいし、苦しいことがあっても希望を捨てずに頑張ろうという気持ちになってもらえたら、このポスターを描いた意味があります」と語りました。

私は、家族で支え合うことの大切さを改めて感じました。父の存在が、私たち家族を強く結びつけてくれています。そして、その絆が地域社会とのつながりを深める原動力になっています。父と母は「ぷてぃ・ぼぬーる」を通じて、地域に暮らす障がい者の相談に乗り、悩みや苦しみを少しでも軽減できるようアドバイスしています。私も父の展示会を手伝い、来場者に障がいについて伝えています。障がいとは、人の中にあるものではなく、社会の中にあるものです。社会が変われば、障がい者も健常者と同じように自由に生きることができるでしょう。私の中学校にもエレベーターが設置され、父は「これで授業参観にも気軽に参加できる」と喜んでいました。こうした変化は小さな一歩かもしれませんが、障がい者が健常者と同じように社会生活を送れるようになるための大切な一歩です。

私は、皆さんと一緒に、誰もが過ごしやすい社会を作り上げていきたいと強く思います。私の父がそうであったように、困難に直面しても希望を捨てずに生きていくことができる社会を築いていきましょう。

最優秀賞　三重県人権擁護委員連合会長賞

「叔母と暮らして感じたこと」

四日市市立内部中学校　１年　今井　彩葉

「こんにちは。」

祖父母の家に今日もやってきた。

「あがっといで。」

奥から祖母の声が聞こえる。私は、靴を脱ぎ真っ先にいつもの部屋に入っていく。ヒューヒューと鳴る医療機械の音を聞きながら、サヨさんの右側に回り、声をかける。

「サヨさん、来たよ。」

パッと目が合う。けれど返事はない。その代わり全身に力をぎゅっと入れて、一秒程してからニカッと笑う。私が来たことを喜んでくれたようだ。これが、私とサヨさんの挨拶だ。

私がサヨさんと呼ぶ叔母は、生まれつき脳に障がいがあり、寝たきりで言葉を話すことができない。重度障がい者と呼ばれている。家族や周囲から医療的ケアなど様々なサポートを受けながら暮らしている。障がいのため笑う時も過度の力が入り、少々時間が掛かる。だから数秒待たないと、叔母が挨拶を返してくれた事を見逃してしまう。側わんで左を向くのが困難なため、話をする時や遊ぶ時は私が右に回り込む。誰かに教わったわけではない。自然とそうなった。叔母はよく笑うし、好きな事も色々あり、結構楽しそうである。私にも「一緒に折り紙しよう！」と、視線や表情、わずかに動く身体でアピールしてくる。そんな叔母とのやりとりは私のごく当たり前の日常である。

しかし、一歩外に出ると叔母は、異質な目でみられる事がある。例えば、町の病院に行き叔母の車椅子を押していると、周りからのジロジロとした視線を感じる。反対に気まずそうに目を逸らされることもある。そんな時、私の心はどんどんしょんぼりしていく。迷惑をかけているのかと思い、焦ってしまう。仲間外れにされたような疎外感から逃げ出したくなる。私が一人で歩いている時には感じない独特の視線と周囲との距離。それ迄どんなに楽しくても、一瞬で気持ちが沈む。まるで静かな水面に、次々と石を投げ入れられたかのようだ。これは叔母と出かける度に感じる心の傷である。待合室では人がいない隅の方に母たちとポツンと座る。母は

「昔より随分良くなったように感じるけど、まだまだやなぁ。」

と言う。昔は戻ってまで見に来る人、「かわいそう」と口にしながらすれ違う人などもいたそうだ。母や祖父母達が、そんな心の傷を負っていた事を初めて知った。悔しい。それでも世の中は良い方向に変化してきていると聞き、嬉しい。そしてもっと良くなって欲しいと思う。

どうしたらこの得体の知れない痛みはなくなるのだろうか。

考えてみると、今の周囲の人は意地悪な気持ちでそうしているのではないのではないかと気付いた。なぜなら私も自分と異なる人に無意識に不安を抱き、距離を置いてしまう事があるからだ。それは決して悪意からではない。よく知らないからだ。反対に、私が叔母を自然に感じるのは、生まれた時から一緒にいてよく知っているから。つまりそこにあるのは「知らない」が作り出す心の障壁だ。今まで関わったことがないから歪な距離を取ってしまう。それならば、まずは「知る」ことが大切なのではないだろうか。

叔母は平日、町の福祉施設に通っている。利用者の多くは、叔母と同じ様に言葉を話せず、表情や目の動きで気持ちを表す。それでもスタッフは利用者一人一人と個々の方法で自然にコミュニケーションをとっている。私は幼少の頃から、この心の通い合う温かな雰囲気が好きだ。しかし、殆どのスタッフがこの施設で働くまで障がい者と接した経験がないと知り、驚いた事があった。

「最初はどう接していいのか分からず不安だった。でも、一緒に過ごす間にみんなのことが大好きになった。」

と、スタッフは口を揃えて言う。共に過ごし知る事は、やはりとても大切なことなのだ。

今も多くの人が無自覚に何かに偏見を持っているのではないだろうか。自分に限って差別や偏見はないと思っている人も少なくないだろう。自分の事として意識するのは容易な事ではない。しかし、一人一人が自分を見つめ直し、偏見や無知に気付く努力をしなくては、誰かの心の傷はなくならない。「知らない」は差別や偏見を作り出す。私も今までの自分を反省し、まず色々な人を「知る」ことから始めようと思う。本やインターネットを通じてその世界を学び、積極的に交流して視野を広げ、気持ちを受け止めていきたい。

様々な人がこの社会の中で、今日も暮らしている。お互いを知り、一緒に笑い、多様な人がいる事が普通に想定された社会。叔母のような障がい者が特別な目で見られることなく、気軽に町の中に出かけられる社会。それは、皆が安心して暮らせる誰にとっても優しい社会なのではないだろうか。私はそんな社会を作れる一人になっていきたい。

最優秀賞　三重県教育委員会教育長賞

「七夕の短冊」

津市立東橋内中学校　２年　キット　アンジェリナ

「お前なんか死ね。お前の家族なんか消えろ。ウクライナなんか消えてしまえ。」この言葉は私が小学校６年生の時に言われた言葉だ。私はこの言葉を言われたとき、茫然として何も言い返せなかった。そして、ショックで涙が溢れて止まらなかった。集会所に迎えに来た母も、この出来事を知って泣いていた。それは、私たち家族は戦争が始まってからずっと不安と戦っていたからだ。

私の母はウクライナ出身だ。ロシアとウクライナの戦争が始まったのは、私が小学校５年生の時である。私は祖国で戦争が始まったことにとても驚いた。戦争が始まってからも、時々叔父とは電話で話すことができていた。母は必死に叔父たちに「死んだらダメだよ」と言っていた。叔父たちも「大丈夫。死なないよ」と返していた。また、叔父たちはテレビ電話でウクライナのきれいな景色を見せてくれることもあった。それから私たちは、祖国での戦争を心配しながらも、日本で平穏な生活をしていた。

２０２３年１２月２５日、私にとってその日は忘れられない日になった。いつも通り、リビングで６歳の弟はテレビを見て、私は宿題をしていた。母は料理をしていた。そこへ一本の電話が入った。その瞬間、母は泣き叫んだ。狂ったように泣いていた。私は今まで見たことがない姿にどうしてよいのかわからなかった。心配になり駆け寄ると「今は話かけないで！」と強く言い放ち、ずっと泣いていた。今は落ち着くのを待とうと思い、弟と待った。しばらくしてから、母が話をしてくれた。その内容は「ママの弟が戦争で亡くなった」だった。私はあまりにもショックで、泣き崩れてしまい、朝まで泣き続けた。自分の気持ちを落ち着かせることは難しかった。それでも、私は意を決し母の元に行き、たくさん話をした。その時感じたことは「なぜ戦争があるの？」ということだった。こんな身近で大切な人が亡くなるとは思ってもいなかった。

叔父の戦死で強く思ったことがある。それは、戦争はこの世の中で一番ひどく醜い「人権侵害」の一つであるということ。人を殺めることは犯罪である。しかし、戦争では人を殺めても罪にならない。むしろ、人が大勢亡くなれば喜ぶ人がたくさんいる。おかしい。戦地ではやらなければやられる。生命尊重を唱う国連憲章とは

矛盾している。人には公共の利益に反しない限り、安心安全に暮らすことができる権利がある。なのに、兵士も住民も毎日生命の危機に怯えて暮らしている。しかもこれが２年以上続いているのである。これを人権侵害と呼ばずして、何になるだろう。

次の日学校から帰宅すると、母はずっと暗い表情で、弟の写真を見つめながら、「戦争は大嫌い」と言っていた。また、「祖国を守ってくれた弟を誇りに思っている」とも言っていた。そしてまだ戦地にいる、もう一人の弟のことをとても心配していた。私が亡くなった叔父と電話で話したのは亡くなる１週間前のことだ。短い電話だったが「気を付けてね。またね」と話したのが最後の会話になってしまった。でももう話をすることは叶わない。私は今年のクリスマスが怖い。それは心から楽しめないし、また母が泣くのではないかと心配だからだ。みんなにとっては楽しい日かもしれないが、私は１２月２３日と２５日が嫌いになった。２３日は叔父が亡くなった日、２５日は叔父が亡くなったことを知った日だ。私は、今年も泣いてしまうと思う。でも、私は母を支えたいと思っている。

中１の３学期に学年集会で、友だちの前で自分の叔父が亡くなった話をした。話すことはとても緊張したし、みんなにどう思われるか怖かったが勇気を振りしぼり話をした。みんな顔を上げて真剣に話を聞いてくれていた。また、涙を流して聞いてくれる友だちもいた。そのとき、「私は一人ではない、仲間がいる」と思い、心強かった。今まで自分の気持ちを人に伝えることは苦手で、正直に打ち明けることはできなかった。でも、この仲間たちなら、私のもやもやした気持ちを受け止めてくれると信じている。

ウクライナについて今まであまり皆の前では話していなかったが、２年生になってからは発表できるようになってきた。それは自分の母国を知ってもらいたいという気持ちと、聞いてもらえるという安心感からだ。ウクライナはとてもいい国だ。そして青い空と黄色いひまわり畑が広がる美しい国だ。そして、本来ウクライナの女性はよく笑う。私もよく笑顔を褒めてもらえる。私の家族もよく笑う。

今年の七夕の短冊に「ウクライナの戦争が終わりますように。平和が訪れますように」と書いた。私の願いが一日も早く叶うことを、心から祈っている。私はいつか大好きなウクライナに行き、自分の目で美しい自然をみたいと思っている。そしてウクライナにいる家族達に会って、皆の笑顔を見ながら、家族団らんの時間を過ごしたい。